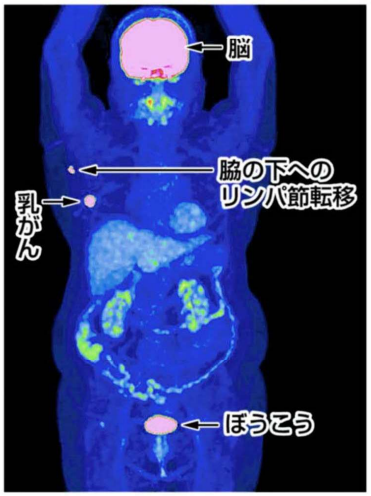
転移がんや早期がん見つけやすく

PET―CT 検査広がる

中国5県 27カ所で装置導入

転移がんや早期がんが見つかりやすい陽電子放射断層撮影装置（ＰＥＴ）検査が広がっている。中国５県では、病院やクリニックの少なくとも27カ所が、ＰＥＴとコンピューター断層撮影装置（ＣＴ）を組み合わせた「ＰＥＴ―ＣＴ」を導入している。小さながんを発見できる一方、ＰＥＴで見つけにくいがんがあることも知っておきたい。

（衣川圭）



㊤最新のＰＥＴ―ＣＴ装置について説明する広川院長（広島市中区の広島平和クリニック）
㊦乳がんの60代女性のＰＥＴ画像の一部。脇の下へのリンパ節転移が分かる。脳とぼうこうはがんとは別の理由で薬が集まっている（広島平和クリニック提供）

ＰＥＴ検査は、がん細胞がブドウ糖を多く取り込む性質を利用する。ブドウ糖に放射性フッ素を含ませた薬「ＦＤＧ」を静脈注射。薬から出る放射線をカメラで捉え、３次元の画像でがんの在りかを突き止める。

13年前に広島県内で初めてＰＥＴ―ＣＴを導入した広島平和クリニック（広島市中区）の広川裕院長は「治療法を決める病期診断にほぼ必須の検査になってきた。がんが再発しても小さな段階で見つけると手を打ちやすい」と説明する。ことし、最新の機器を導入。従来型では見えない小さなリンパ節転移などもはっきり分かるようになった。被曝量が半減できるメリットもある。

福山市の会社員女性（49）は、ＰＥＴ検査に感謝する一人だ。昨年3月、同クリニックでがん検診を受けた。進行して腹水がたまって分かることの多い卵巣がんが見つかった。「自覚症状はなかった。検査しなかったら手遅れだったかもしれない」と振り返る。手術後はさらに、最新型の装置で再発が見つかった。がんがごく小さな段階から、放射線による治療を続けている。

胃や腎臓などは不得手

がんを治療する医師にもＰＥＴ―ＣＴが定着してきた。広島市民病院（中区）乳腺外科の大谷彰一郎医師は「骨の転移までよく分かる」と話す。がんの進行の度合いを見極め、適切な治療を選ぶのに役立っているという。

ＰＥＴ検査は8年前に保険適用が拡大され、広がり始めた。肺がんや悪性リンパ腫、乳がん、大腸がんなどで利用が多い。日本アイソトープ協会によると、２０１７年は検診を含め、全国で推定71万１８００件の検査があり、5年間で13万6千件（23・6％）増えた。検査のできる医療機関も増加。広島県では現在は少なくとも10施設13台が稼働する。

ただ、ＰＥＴにも苦手がある。がんを見つける薬ＦＤＧが集まりにくい胃がんや腎臓がん、前立腺がんなどは見つけにくい。反対に、脳や炎症にも薬が集まりやすいため、がんとの区別が難しいことがある。

気になる被曝の度合いはどうか。ＰＥＴ検査で患者が受ける平均的な被曝線量は7ミリシーベルト。胃のエックス線検査の2倍ほどで、過剰な心配は要らないという。中電病院（中区）放射線科の丸川和志部長は「ＰＥＴ―ＣＴによるがんの発見率は1～2％で、一般の検査の10倍以上。検診はがんが気になる50歳以上の人に勧めたい」という。全額自己負担の検診費用は10万円前後になる。

今後は、がん以外にもＰＥＴ検査の活用が広がりそうだ。アルツハイマー型認知症を早期発見できる可能性もあるという。広島大病院（南区）循環器内科の北川知郎助教は、動脈硬化の見極めにＰＥＴ―ＣＴを使う研究を進める。「心筋梗塞を引き起こしそうな危険な血管が分かる検査の確立を目指したい」と意気込む。